

## ハニ

白浪の 千重ちえ きよに来寄する 住吉すみのえの  
 岸はにふの黄土粉はにふに にほひて行かな

住吉大社は元は海岸線にあり、波が打ち寄せていた。海にちなむ神様(底筒男命、中筒男命、表筒男命)を祭るとともに、古来和歌の神様として親しまれて来た。平安後期、90歳まで生きた藤原俊成も後年、歌の道を極めるために17日間住吉大社に籠もったことがある。何故海の神様が和歌の神様でもあるのか?この謎解きは古伝『秀真伝』が明かす。住吉大社の起源は、伊弉諾尊が金析命(後の住吉神や住吉翁)に海の三神を祭らせたことに始まる。金析命の先祖は、古来船の作成に預かって来た家系であったためである。また金析命は回り歌(上から詠んでも下から詠んでも同じ歌)に詳しいなど、和歌に造詣の深い神様であった。

上記は万葉の歌人の歌であるが、別の歌人は「馬を歩み 押さえ留めよ 住吉の 岸の黄土に にほひて行かむ」と詠む。「にほふ」とは「朝日ににほふ山桜花」の様に、元は照り映えるとか赤く染まる(丹ほふ)という意味合いであった。大社の土で衣を黄褐色に染めて行こうというのであるから、和歌の神様にあやかりうとしたのかもしれない。ここでは埴は黄土と当て字されているが、万葉集では赤土と表記している箇所もある。

埴とは単に土を指すこともあるが、陶器や瓦に使う黄褐色の粘土のことである。『大同類聚方』には、これを依也美(疫病)に用いる方剤が載る。すなわち「ヒサゴ(苦瓢)七分、カハナ(河苔)六分、ハニ(埴)九分、粉に研ぎて水にて飲む」とある。仲景方にも竈中黄土を使う「黄土湯」がある。

実はこの土は、古来食用としても用いられており、世界各地で「土食」の習慣が認められている。日本でもアイヌはユリ根とともに土を煮込んで食べていたという。妊婦が土壁をかじったり、地面の土を食べた事例は古くから知られており、これは妊婦が亜鉛や鉄不足で味覚異常になっただけでなく、土中のミネラルを要求していたのだ。NASAは宇宙飛行士が骨粗鬆症に陥らないように研究し、ある州の粘土が劇的にカルシウムの吸収効率を高めることなどから、これを宇宙飛行士に食べさせている。最近では海外セレブの間で、飲む粘土が話題になっているという。

ところで埴輪を最初に提唱したのは、弓取りの元祖・野見宿禰である。垂仁天皇七年(紀元23年)、野見宿禰が力競べして当麻蹶速を破ったことは『日本書紀』に載るが、弓取りや埴輪の起源は『秀真伝』に詳しい。「角力の里に 埴輪作し 当麻は東より 野見は西に 相立ち踏めば 野見強く 蹶速が脇 踏みてまた 腰踏み殺す 時に君 団扇お上げて 響ませば 臣も喜び 蹶速が 鉄弓および 当麻国 野見に 賜り 家は妻 嗣ぎ成し野見は 弓取りぞこれ」とある。自分で作った鉄弓を踏み張る力があると驕り高ぶっていた当麻蹶速に、出雲から呼び出された野見宿禰が挑戦する。勝利した野見には、蹶速の当麻国と鉄弓が与えられたので弓取りというのである。角力の里とは都のあった纏向近辺の里であろう。ここに作った土俵のことを、当初埴輪と称したのであった。朝廷に仕えた野見宿禰は後に、当時行われていた殉死の風習を止めさせるために、人に替えて埴で作った土偶を墳墓の回りに埋めることを提唱したのである。その土偶のことも埴輪と称するようになった。野見は当麻に対して心の傷を負っていたのかもしれない。人が死ねば魂魄の内、魂は天に、魄は土に帰るとはいえ、制度としての殉死も痛ましいと思ったのであろう。本当に強い者ほど人に優しくなれる。住吉神は天照大神の時、長い内乱を収めた大將軍でもあったが、和を重視した神でもあった。

今年の初場所で優勝した幕尻の徳勝龍は、相撲発祥の地・奈良の出身である。3年後は相撲が始まって2千年目の年に当たる。(山人)

